令和3年12月13日発行
第15号

青森県現代俳句協会会報

第41回弘前俳句大会

今年度から当該大会をも後援することになったことから、その結果を本会員を中心にお知らせします。

当初は10月31日に文化会館で開催する予定でしたが、新型コロナウイルス感染が終息しないことから、紙上大会に変更して開催した。

投句者は１１３名でした。

兼題は、A「菊」、B「紅葉」、C「当季雑詠」の三題でした。

◇総合成績

③（青森県現代俳句協会長賞）中村しおん、

⑥明才地禮子

兼題A「菊」　小野　寿子選

秀逸　博多帯鳴かせて結ぶ菊日和　中村しおん

後藤　岑生選

特選　割烹着子を抱くやうに菊抱へ　髙野万津江

秀逸　絵手紙に一病息災菊一輪　田中　三桃

吉田　紅一選

秀逸　博多帯鳴かせて結ぶ菊日和　中村しおん

秀逸　絵手紙に一病息災菊一輪　田中　三桃

兼題B「紅葉」　木村　秋湖選

秀逸　この先の城へと続く坂紅葉　葛西秋遊子

草野　力丸選

特選　血統は京都ゆずりの濠紅葉　千葉　芳醇

秀逸　桜紅葉しづかに揺るるお濠かな　松宮　梗子

斎藤ひでを選

秀逸　谷底になだれ落ちたる大紅葉　牧　ひろし

兼題C「当季雑詠」会津　鉄山選

秀逸　榲桲や詩碑と存へ香を残す　白戸　星央

石﨑　志亥選

秀逸　母まろく小さし九十の秋袷　大澤　せい

秀逸　一枚の文捨てられぬ残暑かな　小田桐妙女

大瀬　響史選

秀逸　一枚の文捨てられぬ残暑かな　小田桐妙女

小田桐妙女選

特選　曲り屋の闇の傾く虫時雨　明才地禮子

秀逸　喪の帯をはらりと解いて露の夜　中村しおん

桜庭　門九選

秀逸　あかあかと夕日差し入る曼珠沙華　成田　唯央

秀逸　爽やかや素つぽんぽんの露天風呂　大瀬　響史

髙野万津江選

秀逸　曲り屋の闇の傾く虫時雨　明才地禮子

竹浪　克夫選

特選　秋の蝶恋人ほどの距離にきて　森下　睦子

秀逸　喪の帯をはらりと解いて露の夜　中村しおん

土田　紫翠選

秀逸　立原道造ふれたやも水引草　南　美智子

坂本　幽弦選

秀逸　新種出てついて行けずと踊り出す　木村　詩織

第12回秋の吟行互選俳句大会

日時　令和３年11月26日

今年も新型コロナウイルス対策のため、自主吟行として希望者（48名）による大会としました。

成績は10位までは上位に記載し、以下は参加者全員の作品を紹介します。

①芒原ここが青良の指定席　千葉　芳醇

②赤とんぼ絵本の窓が開いてゐる　松宮　梗子

③自然薯をモーゼの杖のごと提げ来　田村　正義

④一村の老いゆく眠り柿たわわ　後藤　岑生

⑤笑み溢る鎮守の鬼こ稲穂垂る　赤坂　雪洲

⑥海峡向く海峡の家冬隣　森下　睦子

⑦小春日やほろりと今が過去になる　大澤　せい

⑧照らされて竜がのたうつ菊祭り　成田　唯央

⑨竹山の三味を辿れば雁がねも　白戸　星央

⑩水色の塩瀬の帯や紅葉舞ふ　木村　詩織

並木道光降るごと銀杏散る　関　礼子

茱萸熟るる村一軒の美容院　長尾　青竜

星空を真二つに裂き冬銀河　清水山楂子

しづかなる水に紅葉の燃え上がる　成田みどり

歳時記の文字立ち上る黄葉期　三浦星津女

千空亡き街光点の秋燕　竹鼻瑠璃男

文化の日背番号３は不滅です　大瀬　響史
鯱鉾のさらに仰け反る小六月　佐々木朴花
正解は一つにあらず鰯雲　桜田　花音
断捨離の真逆を諭し暮の秋　雪田　樹理
艶やかに終る一日菊花展　葛西秋遊子
ままごとに祖母の茶道具秋深し　新谷のらねこ
忘却の君の記事読む帰り花　渡辺　芳文
大陸の風の中より小鳥来る　桜田　花音
朱を纏ふ津軽鉄道秋の暮　赤坂　雪洲
道百選こみせを走る散紅葉　阿保　子星
空を切る斧も枯れたりいぼむしり　田中　三桃
半島の指呼に迫りて鰯干す　牧　ひろし
戻れぬがＵターンできる神無月　秋庭善知鳥
目力のコロナマスクやカンナ燃る　成田みどり
湯豆腐の湯気がとりもつ夫婦仲　杉本心太郎
休耕田に考の顔して月昇る　竹鼻瑠璃男
釣瓶落し密教の里訪ね来て　白戸　星央
落葉踏むＸのついてるベンチかな　大瀬　響史
天空や歓声呑み込み谷紅葉　明才地禮子
黄落や心しづかに樹下に佇つ　山谷　文子
山盛りの落葉に木々の記憶かな　小田桐妙女
さあふじだ十月最後の金曜日　木村　匡
羊群の雲湧く如く牧の秋　牧　ひろし
小春日の空は青くてただ歩く　川村　英幸
時雨るるや誘導員の棒光る　川村　英幸
大波の陽を包み込み秋の果　葛西秋遊子
陸奥びとの大きな手なり稲を刈る　田村　正義
晴るる日の直立不動破れ蓮　佐藤いく子

伽藍堂の松籟奏ず隙間風　長尾　青竜
奥日光禊の水の澄みにけり　坂本　吟遊
散紅葉階ゆるき本丸へ　鈴木とまと
土偶の瞳靜もる社へ木の実降る　後藤　岑生
笑み栗の掌にこんもりと仏顔　油川　月萌
帰り花ベビーカーには犬のせて　佐々木朴花
紅葉山座して二人に刻流る　土田　紫翠
恭造の詩をまた聴く秋の暮　森下　睦子
がんがんのラジオとをんな林檎園　松宮　梗子
紅葉照り白く浮き出る夜の城　成田　唯央
冬至湯や日ざしの底のあたたかさ　杉本心太郎
視・触診指の感覚秋暮るる　雪田　樹理
港町風独り相撲冬に入る　木村　匡
ああかなし鮭の屍の流れゆく　橘川まもる
柳散るやゴルファー一打のひねり腰　橘川まもる
ハンドルを握る人皆マスクして　清水山楂子
赤羽へ林檎のこころ送りけり　三浦星津女
産土に句碑の文字浸む露時雨　秋庭善知鳥
一陣の風に不適な案山子かな　和田　宗三
だんだんに鍋の大きく芋の秋　和田　宗三
呟きて囁いて一句帰り花　大澤　せい
ドロノキの瘤少し見ゆ散紅葉　佐藤いく子
桜紅葉ネックレスロード飾るなり　尾野　久子
薊摘む老女は逝き涙雨　尾野　久子
今日もまた沖見る嫗小浜菊　南　美智子
投票日右か左か穴まどひ　南　美智子
小春日や名残り惜しみつ日向ぼこ　渡邊　寂隆
がさがさと落葉踏み締め初の霜　渡邊　寂隆

背広着て父似の息子七五三　中村しおん
菊人形メンテナンスも抜かりなく　中村しおん
空澄みて旧偕行社晴れ晴れし　坂本　吟遊
西濠を行きつ戻りつ帰り花　鈴木とまと
御仏の眼差ざし伏せめ照紅葉　明才地禮子
夕暮れのすすき穂照れり人妖し　坂本　秋霜
風凪ぎて白鳥ファミリー和ませり　坂本　秋霜
にぎはしや蒲の穂わたのほわほわと　三橋　聖
吾もまた旅人なれや鳥渡る　三橋　聖
帯締めは聴衆一つに文化の日　木村　詩織
色変へぬ松の眼下に裸婦の像　油川　月萌
橋渡りトンネルを抜け紅葉山　土田　紫翠
紅葉舞ふ風湧く調べ津軽三味　阿保　子星
秋薔薇に皆立ち止る真紅かな　山谷　文子
墓苑いま桜落葉の吹き溜る　関　礼子
冬の日や半角文字のごと板書　新谷のらねこ
少年と鮫の枯葉のプールかな　小田桐妙女
綱渡りはっと息のみ銀杏散る　渡辺　芳文
紅葉の御籤大吉岩木山　坂本　幽弦
秋色の岩木神社を登り降る　坂本　幽弦
冬隣ゴム長靴のずかずかと　田中　三桃
街路樹の落葉を集め只管打坐　千葉　芳醇
蓮枯れて胸中に響くハレルヤ　吉田　昼顔
菊の香や翅のある虫みな集う　吉田　昼顔

発行所　青森県現代俳句協会
発行人　後藤　岑生
〒030-0853 青森市金沢４の10の13